



イチゴ新品種「東京おひさまベリー」の栽培試験と苗販売について

露地栽培用イチゴ「東京おひさまベリー」は、2019年3月19日に品種登録されました。本品種は従来品種と比べ、果実が大きく、内部も鮮やかな赤色で、独特の香りを有し食味も良好です（図1）。しかし、収穫開始時期が従来品種より1週間ほど遅いことが課題です。そこで、都内で5月のゴールデンウィークに収穫できるように、トンネル被覆による保温で収穫期を前進化させるための栽培試験を行っています（図2）。また、イチゴの露地栽培は、10月の定植から収穫終了の6月まで、圃場を長期間占有します。栽培期間を短縮し圃場の有効活用を図るため、春（2～3月）に苗を定植し、5月に果実を収穫する新たな作型の開発にも取り組んでいます。

東京おひさまベリーの苗は、2019年春から、生産者向けは三好アグリテック（株）、家庭菜園向けは園芸種苗を扱っている通販サイトで販売されています。おかげさまで、2019年は1万株以上の苗が販売開始後まもなく売り切れてしまいました。10月の東京農林水産フェアでも販売いたしましたが、大好評で完売となりました（図3）。（園芸技術科 野菜研究チーム）



図1 東京おひさまベリー



図2 トンネル被覆を用いた栽培試験



図3 東京農林水産フェアでのイチゴ苗販売

本年は、農総研の前身である東京府立農事試験場開設120年、東京府立種畜場開設100年、東京都立食品技術センター開設30年を迎えます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

春を彩る花きの生産技術を開発しています！

<切り花チューリップの簡易水耕システムを開発>

都内に増加する農産物直売所に出荷する農家向けに、初期の設備費用が少なく、簡単に切り花を生産できるチューリップの新たな簡易水耕システムを開発しました。

市販の鉢トレイ、ヤシ殻繊維、アンダートレイとしてガーデンパレット等の3種類の資材を利用して、だれでも簡単に作れます(図1)。給液管理は、根長1cmくらいまでは水道水のみ、それ以後は液肥を週1回与えます。土を使わず狭い面積で効率良く栽培でき、切り花生産だけでなく、店頭において消費者が好みの花を選べるなどの使い方が可能です。(江戸川分場)

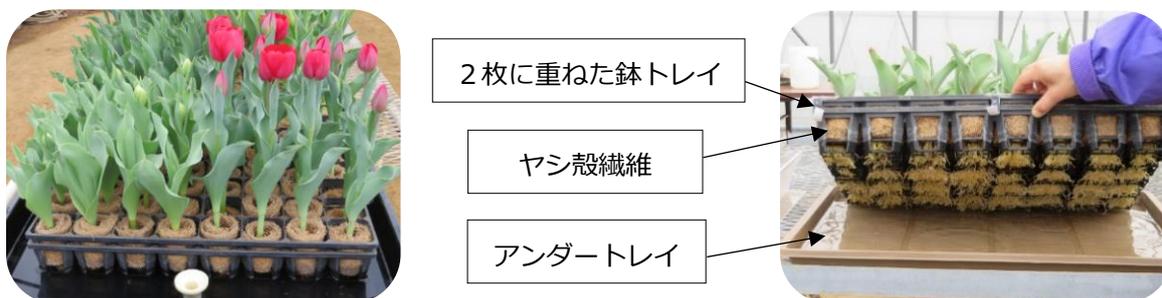


図1 簡易水耕システム(鉢トレイ2枚を重ね、球根をヤシ殻繊維に包んだ状態で栽培)
(左) 上から見た様子 (右) 根張りの様子

<布団資材活用による花きハウスの暖房コスト大幅削減>

冬季の花きハウス栽培では、ハウス内温度を一定以上に保つ必要がありますが、近年の燃料費高騰から、夜間暖房のコスト削減が課題となっています。布団資材と呼ばれる多層性保温資材は、内部に空気の層を含むことで高い保温性を有します。そこで、冬季にハウスの内張りとして布団資材を用いた場合の省エネ効果を調査しました。その結果、布団資材を使用したハウス(図1)では、慣行の農業用ポリエチレンフィルムを内張りしたハウスと比較して、燃料費を最大35%削減しつつ、プリムラ(図2)の切り花を慣行方式と同水準で生産することができました。現在は花きの冬季ハウス栽培における布団資材の有用性について、さらに利用場面を拡大して検討しています。(園芸技術科 花き研究チーム)

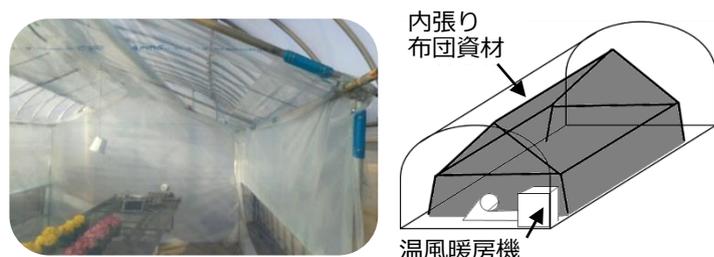


図1 内張りに布団資材を用いたハウス・模式図



図2 試験に用いたプリムラ

マーケティング調査を活かして、より魅力的なウドを開発中！

東京都産の軟化ウド（通称：東京ウド）は、江戸時代から栽培されている多摩地区の特産品です（図1）。しかし近年、生産者の高齢化や需要の低下により、生産量が減少しつつあります。そこで、東京ウドの生産・消費拡大を目指してマーケティング調査を行い、生産振興に向けた課題を整理しました。

農家や販売店へのヒアリングや統計資料の調査から、生産面では、市場における軟化ウドの出荷時期は1～4月が多く、価格は6月や10～12月に高くなることが分かりました。流通面では、出荷の量や時期が不安定であること、カット時の褐変が問題となっていました。また、従来の茎が長いウドよりも、扱いやすい短茎タイプのニーズが大きいことも分かりました。消費面では、特に若い世代で購入や調理経験のある人が少ないことが分かりました。

これらのことから東京ウドの生産・消費拡大のための課題として、①出荷量の安定化と作期拡大、②変色防止技術の開発、③ニーズに合った短茎規格の開発、④若年層を主な対象としたPR活動、の4点が重要と考えられました。

「出荷量の安定化と作期拡大」には、従来品種では深く休眠して生産が困難であった11～12月中旬に安定して生産できる、休眠の浅い品種の開発が有効と考えられます。現在、農総研では東京都の主要品種である春ウド「都」と、休眠の浅い寒ウド「湖北系」の交配により、休眠が浅く高品質な品種の開発を進めています（図2、3）。（園芸技術科 バイテク研究チーム）



図1 東京ウド
(2月収穫)



図2 ウドの有望系統
(12月中旬収穫)

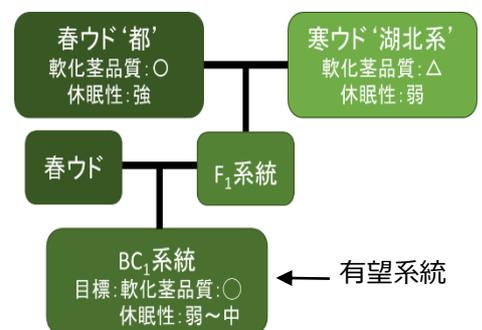


図3 休眠の浅いウド品種の開発



調査結果の詳細は、
こちらをご覧ください

東京の気候に適した無花粉スギを選抜しています

東京都では、花粉症対策の一環として少花粉のスギやヒノキを植栽しています。このような中、他県の一部地域では花粉を作らないスギ、いわゆる無花粉スギ（図1）が発見されてきましたが、東京都ではまだ無花粉スギは見出されていません。そこで、農総研では、東京の優良なスギの遺伝特性を保持し、東京の気候や風土に適した無花粉スギ品種の育成を目指し、他地域の無花粉スギ品種・系統に東京のスギ精英樹（成長が良く、まっすぐに育つスギ）を交配し、新たな無花粉スギ系統を多数作出しました。

これら東京の優良なスギ系統の遺伝子が入った無花粉スギ系統を試験林に植栽し、その中から成長や材質が特に優れる1系統を選抜しました（図2）。選抜した系統は、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所林木育種センターの「優良品種・技術評価委員会」に、無花粉スギの優良品種候補として申請する予定です。この系統が無花粉スギの優良品種として認定されれば、増殖して都内の林地で活用していく予定です。（緑化森林科 森林研究チーム）

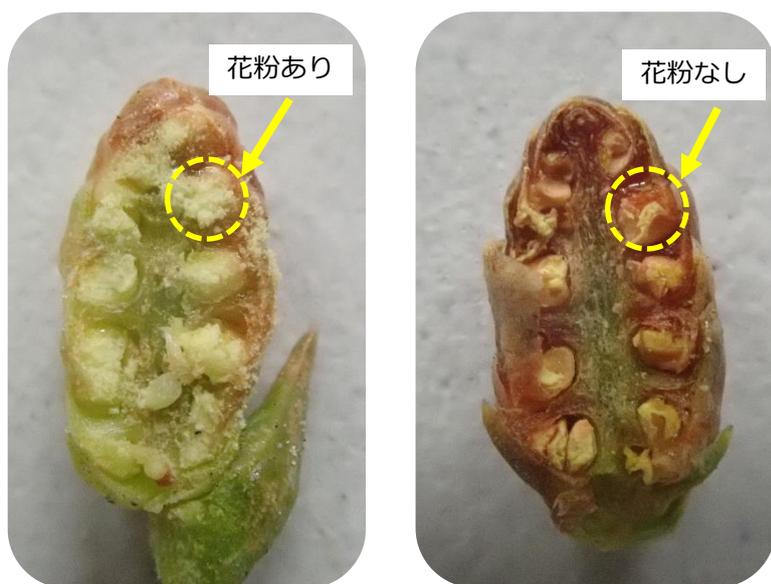


図1 普通のスギ（左）と無花粉スギ（右）の雄花断面
（普通のスギは、丸い葯（やく）の中に花粉が詰まっています）



図2 選抜した無花粉スギ系統

※ 本研究は、イノベーション創出強化研究推進委託事業（農林水産省）の支援を受けて行いました。



育てます豊かな食とみどりの東京

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町3-8-1 HP: <https://www.tokyo-aff.or.jp>

TEL: 042-528-5216

Twitter: @tokyo_tdfaff

こちらのQRコード
からご覧ください

